海潮音

上田敏

上田敏訳

青空文庫

目次

海潮音 7

遙に満洲なる森鴎外氏に此の書を献ず

大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる。

獅子舞歌

海潮音　序

巻中収むる処の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亜に三人、英吉利に四人、独逸に七人、プロヴァンスに一人、而して仏蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに属する者その大部を占む。

高踏派の壮麗体を訳すに当りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉体を翻するに多少の変格を敢てしたるは、その各の原調に適合せしめむが為なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意にあらず、これ或は山岳と共に旧きものならむ。然れどもこれを作詩の中心とし本義として故らに標榜する処あるは、蓋し二十年来の仏蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の仏詩は高踏派の名篇に於て発展の極に達し、彫心鏤骨の技巧実に燦爛の美を恣にす、今ここに一転機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、ヴェルレエヌの名家これに観る処ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。訳者は今の日本詩壇に対て、専らこれに則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる処か、訳者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦渋と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新声、今人胸奥の絃に触るるにあらずや。坦々たる古道の尽くるあたり、荊棘路を塞ぎたる原野に対て、これが開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば惰なり。

訳者嘗て十年の昔、白耳義文学を紹介し、稍後れて、仏蘭西詩壇の新声、特にヴェルレエヌ、ヴェルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西欧の評壇に於ても今日の声誉を博する事能はざりしが、爾来世運の転移と共に清新の詩文を解する者、漸く数を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全欧思想界の一方に覇を称するに至れり。人心観想の黙移実に驚くべきかな。近体新声の耳目に嫺はざるを以て、倉皇視聴を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の伝来、日なほ浅く、作未だ多からざるに当て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を為す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神経の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神経こそ寧ろ過敏の徴候を呈したらずや。未だ新声の美を味ひ功を収めざるに先ちて、早くその弊竇に戦慄するものは誰ぞ。

欧洲の評壇また今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。仏蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。訳者は芸術に対する態度と趣味とに於て、この偏想家と頗る説を異にしたれば、その云ふ処に一々首肯する能はざれど、仏蘭西詩壇一部の極端派を制駁する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の声として、その一端をかの「芸術論」に露したるに至りては、全く賛同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は訳者の欽仰措かざる者なりと雖も、その人生観に就ては、根本に於て既に訳者と見を異にす。抑も伯が芸術論はかの世界観の一片に過ぎず。近代新声の評隲に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「芸術論」の一部を抽読して、象徴派の貶斥に一大声援を得たる如き心地あるは、毫も清新体の詩人に打撃を与ふる能はざるのみ

か、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生観の根本問題に於て、伯と説を異にしながら、その論理上必須の結果たる芸術観のみに就て賛意を表さむと試むるも難いかな。

　象徴の用は、これが助を藉りて詩人の観想に類似したる一の心状を読者に与ふるに在りて、必らずしも同一の概念を伝へむと勉むるに非ず。されば静に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に応じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道断の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に対する解釈は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するに在りとす。例へば本書一〇二頁「鷺の歌」を誦するに当て読者は種々の解釈を試むべき自由を有す。この詩を広く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を営みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた楽欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。これを捉へむとしてえせず、この世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釈たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉体の欲に※きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縦生活の悲愁ここに湛へられ、或は空想の泡沫に帰するを哀みて、真理の捉へ難きに憧がるる哲人の愁思もほのめかさる。而してこの詩の喚起する心状に至りては皆相似たり。一二五頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「楽欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や帰り来れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等黙然として頭俛れ、齎らす処只幻惑の悲音のみ。孤りこれ等の姉妹と道を異にしたるか、終に帰り来らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香の美、今の仏詩壇に冠たる詩なり。

　訳述の法に就ては訳者自ら語るを好まず。只訳詩の覚悟に関して、ロセッテイが伊太利古詩翻訳の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自国詩文の技巧の為め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。しかも彼所謂逐語訳は必らずしも忠実訳にあらず。されば「東行西行雲眇眇。二月三月日遅遅」を「とざまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうううら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱が二条の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の楼に上る」と詠じたる例に従ひたる処多し。

明治三十八年初秋

上田敏

海潮音

燕の歌　ガブリエレ・ダンヌンチオ

弥生(やよひ)ついたち、はつ燕(つばめ)、
海のあなたの静けき国の
便(たより)もてきぬ、うれしき文(ふみ)を。
春のはつ花、にほひを尋(と)むる。
あゝ、よろこびのつばくらめ。
黒と白との染分縞(そめわけじま)は
春の心の舞姿。

弥生来にけり、如月(きさらぎ)は
風もろともに、けふ去りぬ。
栗鼠(りす)の毛衣脱ぎすてて、
綾子羽(りんず)ぶたへ今様(いまよう)に、
春の川瀬をかちわたり、
しなだるゝ枝の森わけて、
舞ひつ、歌ひつ、足速(あしばや)の
恋慕の人ぞむれ遊ぶ。
岡に摘む花、菫(すみれ)ぐさ、
草は香りぬ、君ゆゑに、
素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻(にひづま)の姿に通ひ、
わだつみの波は輝く阿古屋珠(あこやだま)。
あれ、藪陰(やぶかげ)の黒鶫(くろつぐみ)、
あれ、なか空(そら)に揚雲雀(あげひばり)。
つれなき風は吹きすぎて、
旧巣(ふるすくは)喞へて飛び去りぬ。
あゝ、南国のぬれつばめ、
尾羽(をば)は矢羽根(やばね)よ、鳴く音は弦(つる)を
「春」のひくおと「春」の手の。

あゝ、よろこびの美鳥(うまどり)よ、
黒と白との水干(すいかん)に、
舞の足どり教へよと、
しばし招がむ、つばくらめ。
たぐひもあらぬ麗人(れいじん)の
イソルダ姫の物語、
飾り画(ゑが)けるこの殿(との)に
しばしはあれよ、つばくらめ。
かづけの花環こゝにあり、
ひとやにはあらぬ花籠を
給ふあえかの姫君は、
フランチェスカの前ならで、
まことは「春」のめがみ大神(おほがみ)。

声曲（もののね）

ガブリエレ・ダンヌンチオ

われはきく、よもすがら、わが胸の上に、君眠る時、
吾は聴く、夜の静寂（しづけき）に、滴（したたり）の落つるを将（はた）、落つるを。
常にかつ近み、かつ遠み、絶間（たえま）なく落つるをきく、
夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われひとりして。

真昼

ルコント・ドウ・リイル

「夏」の帝の「真昼時」は、大野が原に広ごりて、
白銀色の布引に、青天くだし天降しぬ。
寂たるよもの光景かな。耀く虚空、風絶えて、
炎のころも、纏ひたる地の熟睡の静心。

眼路眇茫として極無く、樹蔭も見えぬ大野らや、
牧の畜の水かひ場、泉は涸れて音も無し。
野末遙けき森陰は、裾の界の線黒み、
不動の姿夢重く、寂寞として眠りたり。

唯熟したる麦の田は黄金海と連なりて、
かぎりも波の揺蕩に、眠るも鈍と嘲みがほ、
聖なる地の安らけき児等の姿を見よやとて、
畏れ憚るけしき無く、日の觴を嚥み干しぬ。

また、邂逅に吐息なす心の熱の穂に出でゝ、
囁声のそこはかと、鬚長頷の胸のうへ、
覚めたる波の揺動や、うねりも貴におほどかに
起きてまた伏す行末は沙たち迷ふ雲のはて。

程遠からぬ青草の牧に伏したる白牛が、
肉置厚き喉袋、涎に濡らす慵げさ、
妙に気高き眼差も、世の煩累に倦みしごと、
終に見果てぬ内心の夢の衢に迷ふらむ。

人よ、爾の心中を、喜怒哀楽に乱されて、
光明道の此原の真昼を孤り過ぎゆかば、
※がれよ、こゝに万物は、凡べて虚ぞ、日は燬かむ。
ものみな、こゝに命無く、悦も無し、はた憂無し。

されど涙や笑声の惑を脱し、万象の
流転の相を忘ぜむと、心の渇いと切に、
現身の世を赦しえず、はた咀ひえぬ観念の
眼放ちて、幽遠の大歓楽を念じなば、

来れ、此地の天日にこよなき法の言葉あり、
親み難き炎上の無間に沈め、なが思、
かくての後は、濁世の都をさして行くもよし、
物の七たび涅槃に浸りて澄みし心もて。

大饑餓　　ルコント・ドゥ・リイル

夢円なる滄溟、濤の巻曲の揺蕩に
夜天の星の影見えて、小島の群と輝きぬ。
紫摩黄金の良夜は、寂寞としてまた幽に
奇しき畏の満ちわたる海と空との原の上。

無辺の天や無量海、底ひも知らぬ深淵は
憂愁の国、寂光土、また譬ふべし、※耀郷。
墳塋にして、はた伽藍、赫灼として幽遠の
大荒原の縦横を、あら、万眼の魚鱗や。

青空かくも荘厳に、大水更に神寂びて
大光明の遍照に、宏大無辺界中に、
うつらうつらの夢枕、煩悩界の諸苦患も、
こゝに通はぬその夢の限も知らず大いなる。

かゝりし程に、粗膚の蓬起皮のしなやかに
飢にや狂ふ、おどろしき深海底のわたり魚、
あふさきるさの徘徊に、身の鬱憂を紛れむと、
南蛮鉄の腮をぞ、くわつとばかりに開いたる。

素より無辺天空を仰ぐにはあらぬ魚の身の、
参の宿、みつ星や、三角星や天蝎宮、
無限に曳ける光芒のゆくてに思馳するなく、
北斗星前、横はる大熊星もなにかあらむ。

唯、ひとすぢに、生肉を噛まむ、砕かむ、割かばやと、
常の心は、朱に染み、血の気に欲を湛へつゝ、
影暗うして水重き潮の底の荒原を、
曇れる眼、きらめかし、悽惨として遅々たりや。

こゝ虚なる無声境、浮べる物や、泳ぐもの、
生きたる物も、死したるも、此空漠の荒野には、
音信も無し、影も無し。たゞ水先の小判鮫、
真黒の鰭のひたうへに、沈々として眠るのみ。

行きね妖怪、なれが身も人間道に異ならず、
醜悪、獰猛、暴戻のたえて異なるふしも無し。
心安かれ、鱶ざめよ、明日や食らはむ人間を、
又さはいへど、汝が身も、明日や食はれむ、人間に。

聖なる飢は正法の永くつゞける殺生業、
かげ深海も光明の天つみそらもけぢめなし。
それ人間も、鱶鮫も、残害の徒も、餌食等も、
見よ、死の神の前にして、二つながらに罪ぞ無き。

象

ルコント・ドゥ・リイル

沙漠は丹の色にして、波漫々たるわだつみの
音しづまりて、日に燬けて、熟睡の床に伏す如く、
不動のうねり、大らかに、ゆくらゆくらに伝らむ、
人住むあたり銅の雲、たち籠むる眼路のすゑ。

命も音も絶えて無し。餌に飽きたる唐獅子も、
百里の遠き洞窟の奥にや今は眠るらむ。
また岩清水迸る長沙の央、青葉かげ、
豹も来て飲む椰子森は、麒麟が常の水かひ場。

大日輪の走せ廻る気重き虚空鞭うつて、
羽掻の音の声高き一鳥遂に飛びも来ず、
たまたま見たり、蟒蛇の夢も熱きか円寝して、
とぐろの綱を動せば、鱗の光まばゆきを。

一天霽れて、そが下に、かゝる炎の野はあれど、
物鬱として、寂寥のきはみを尽すをりしもあれ、
皺だむ象の一群よ、太しき脚の練歩に、
うまれの里の野を捨てゝ、大沙原を横に行く。

地平のあたり、一団の褐色なして、列なめて、
みれば砂塵を蹴立てつゝ、路無き原を直道に、
ゆくてのさきの障碍を、もどかしとてや、力足、
蹈鞴しこふむ勢に、遠の砂山崩れたり。

導にたてる年嵩のてだれの象の全身は
「時」が噛みてし、刻みてし老樹の幹のごと、ひわれ
巨巌の如き大頭、脊骨の弓の太しきも、
何の苦も無く自づから、滑らかにこそ動くなれ。

歩遅むることもなく、急ぎもせずに、悠然と、
塵にまみれし群象をめあての国に導けば、
沙の畦くろ、穴に穿ち、続いて歩むともがらは、
雲突く修験山伏か、先達の蹤蹈でゆく。

耳は扇とかざしたり、鼻は象牙に介みたり、
半眼にして辿りゆくその胴腹の波だちに、
息のほてりや、汗のほけ、烟となつて散乱し、
幾千万の昆虫が、うなりて集ふ餌食かな。

饑渇の攻や、貪婪の羽虫の群もなにかあらむ、
黒皺皮の満身の膚をこがす炎暑をや。
かの故里をかしまだち、ひとへに夢む、道遠き
眼路のあなたに生ひ茂げる無花果の森、象の邦。

また忍ぶかな、高山の奥より落つる長水に
巨大の河馬の嘯きて、波濤たぎつる河の瀬を、

あるは月夜の清光に白みしからだ、うちのばし、
水かふ岸の葦蘆を蹈み砕きてや、降りたつを。

かゝる勇猛沈勇の心をきめて、さすかたや、
涯も知らぬ遠のすゑ、黒線とほくかすれゆけば、
大沙原は今さらに不動のけはひ、神寂びぬ。
身動迂き旅人の雲のはたてに消ゆる時。

ルコント・ドゥ・リイルの出づるや、哲学に基ける厭世観は仏蘭西の詩文に致死の棺衣を投げたり。前人の詩、多くは一時の感慨を洩し、単純なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、この詩人に至り、始めて、悲哀は一種の系統を樹て、芸術の荘厳を帯ぶ。評家久しく彼を目するに高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬドゥ・ミユッセエ、ラマルティイヌの後に出で、始て詩神の雲髪を捉みて、これに峻厳なる詩法の金櫛を加へたるが故也。彼常に「不感無覚」を以て称せらる。世人輒もすれば、この語を誤解して曰く、高踏一派の徒、甘じて感情を犠牲とす。これ既に芸術の第一義を没却したるものなり。或は恐る、終に述作無きに至らむをと。あらず、あらず、この暫々濫用せらるる「不感無覚」の語義を芸文の上より解する時は、単に近世派の態度を示したるに過ぎざるなり。常に宇宙の深遠なる悲愁、神秘なる歓楽を覚ゆるものから、当代の愚かしき歌物語が、野卑陳套の曲を反復して、譬へば情痴の涙に重き百葉の軽舟、今、芸苑の河流を閉塞するを敬せざるのみ。尋常世態の瑣事、奚ぞよく高踏派の詩人を動さむ。されどこれを倫理の方面より観むか、人生に対するこの派の態度、これより学ばむとする教訓はこの一言に現はる。曰く哀楽は感ず可く、歌ふ可し、然も人は斯多阿学徒の心を以て忍ばざる可からずと。かの額付、物思はしげに、長髪わざとらしき詩人等もこの語には辟易せしも多かり。さればこの人は芸文に劃然たる一新機軸を出しし者にして同代の何人よりも、その詩、哲理に富み、譬喩の趣を加ふ。「カイン」「サタン」の詩二つながら人界の災殃を賦し、「イパティイ」は古代衰亡の頽唐美、「シリル」は新しき信仰を歌へり。ユウゴオが壮大なる史景を咏じて、台閣の風ある雄健の筆を振ひ、史乗逸話の上に叙情詩めいたる豊麗を与へたると並びて、ルコント・ドゥ・リイルは、伝説に、史蹟に、内部の精神を求めぬ。かの伝奇の老大家は歴史の上に燦爛たる紫雲を曳き、この憂愁の達人はその実体を闡明す。

＊

読者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪壮悲惨なる北欧思想、明暢清朗なる希臘田野の夢、または銀光の朧々たること、その聖十字架を思はしむる基督教法の冥想、特に印度大幻夢涅槃の妙説なりけり。

＊

黒檀の森茂げきこの世の涯の老国より来て、彼は長久の座を吾等の傍に占めつ、教へて曰く『寂滅為楽』。

＊

幾度と無く繰返したる大智識の教話によりて、悲哀は分類結晶して、頗る静寧の姿を得たるも、なほ、をりふしは憤怒の激発に迅雷の轟然たるを聞く。ここに於てか電火ひらめき、万雷はためき、人類に対する痛罵、宛も薬綫の爆発する如く、所謂「不感無覚」の墻壁を破り了ぬ。

＊

自家の理論を詩文に発表して、シォペンハウエルの弁証したる仏法の教理を開陳したるは、この詩人の特色ならむ。儕輩(さいはい)の詩人皆多少憂愁の思想を具(そな)へたれど、厭世観の理義彼に於ける如く整然たるは罕(まれ)なり。衆人徒(いたづ)らに虚無を讃す。彼は明かにその事実なるを示せり。その詩は智の詩なり。然も詩趣饒(ゆた)かにして、坐(そぞ)ろにペラスゴイ、キュクロプスの城址(じょうし)を忍ばしむる堅牢(けんろう)の石壁は、かの繊弱の律に歌はれ、往々俗謡に傾ける当代伝奇の宮殿を摧(くだ)かむとすなり。

エミイル・ヴェルハアレン

珊瑚礁

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

波の底にも照る日影、神寂びにたる曙の
照しの光、亜比西尼亜、珊瑚の森にほの紅く、
ぬれにぞぬれし深海の谷隈の奥に透入れば、
輝きにほふ虫のから、命にみつる珠の華。

沃度に、塩にさ丹づらふ海の宝のもろもろは
濡髪長き海藻や、珊瑚、海胆、苔までも、
臙脂紫あかあかと、華奢のきはみの絵模様に、
薄色ねびしみどり石、蝕む底ぞ被ひたる。

鱗の光のきらめきに白琺瑯を曇らせて、
枝より枝を横ざまに、何を尋ぬる一大魚、
光透入る水かげに慵げなりや、もとほりぬ。

忽ち紅火飄へる思の色の鰭ふるひ、
藍を湛へし静寂のかげ、ほのぐらき清海波、
水揺りうごく揺曳は黄金、真珠、青玉の色。

床

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

さゝらがた錦を張るも、荒妙の白布敷くも、
悲しさは墳塋のごと、楽しさは巣の如しとも、
人生れ、人いの眠り、つま恋ふる凡べてこゝなり、
をさな児も、老も若も、さをとめも、妻も、夫も。

葬事、まぐはひがひ、烏羽玉の黒十字架に
浄き水はふり散らすも、祝福の枝をかざすも、
皆こゝに物は始まり、皆こゝに事は終らむ、
産屋洩る初日影より、臨終の燭の火までも、

天離る鄙の伏屋も、百敷の大宮内も、
紫摩金の栄を尽して、紅に朱に矜り飾るも、
鈍色の樫のつくりや、楓の木、杉の床にも。

独り、かの畏も悔も無く眠る人こそ善けれ、
みおやらの生れし床に、みおやらの失にし床に、
物古りし親のゆづりの大床に足を延ばして。

出征

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

高山の鳥栖巣だちし兄鷹のごと、
身こそたゆまね、憂愁に思は倦じ、
モゲルがた、パロスの港、船出して、
雄詰ぶ夢ぞ逞ましき、あはれ、丈夫。

チパンゴに在りと伝ふる鉱山の
紫摩黄金やわが物と遠く、求むる
船の帆も撓わりにけりな、時津風、
西の世界の不思議なる遠荒磯に。

ゆふべゆふべは壮大の旦を夢み、
しらぬ火や、熱帯海のかぢまくら、
こがね幻通ふらむ。またある時は

白妙の帆船の舳さき、たゝずみて、
振放みれば、雲の果、見知らぬ空や、
蒼海の底よりのぼる、けふも新星。

夢

シュリ・プリュドン

夢のうちに、農人曰く、なが糧をみづから作れ、
けふよりは、なを養はじ、土を墾り種を蒔けよと。
機織はわれに語りぬ、なが衣をみづから織れと。
石造われに語りぬ、いざ鏝をみづから執れと。

かくて孤り人間の群やらはれて解くに由なき
この咒詛、身にひき纏ふ苦しさに、みそら仰ぎて、
いと深き憐愍垂れさせ給へよと、祷りをろがむ
眼前、ゆくての途のたゞなかを獅子はふたぎぬ。

ほのぼのとあけゆく光、疑ひて眼ひらけば、
雄々しかる田つくり男、梯立に口笛鳴らし、
※具の※木もとゞろ、小山田に種ぞ蒔きたる。

世の幸を今はた識りぬ、人の住むこの現世に、
誰かまた思ひあがりて、同胞を凌ぎえせむや。
其日より吾はなべての世の人を愛しそめけり。

信天翁　　シャルル・ボドレエル

波路遙けき徒然の慰草と船人は、
八重の潮路の海鳥の沖の太夫を生擒りぬ、
楫の枕のよき友よ心閑けき飛鳥かな、
津潮騒すべりゆく舷近くむれ集ふ。

たゞ甲板に据ゑぬればげにや笑止の極なる。
この青雲の帝王も、足どりふらゝ、拙くも、
あはれ、真白き双翼は、たゞ徒らに広ごりて、
今は身の仇、益も無き二つの櫂と曳きぬらむ。

天飛ぶ鳥も、降りては、やつれ醜き瘠姿、
昨日の羽根のたかぶりも、今はた鈍に痛はしく、
煙管に嘴をつゝかれて、心無には嘲けられ、
しどろの足を摸ねされて、飛行の空に憧がるゝ。

雲居の君のこのさまよ、世の歌人に似たらずや、
暴風雨を笑ひ、風凌ぎ猟男の弓をあざみしも、
地の下界にやらはれて、勢子の叫に煩へば、
太しき双の羽根さへも起居妨ぐ足まとひ。

薄暮の曲　シャルル・ボドレエル

時こそ今は水枝さす、こぬれに花の顫ふころ。
花は薫じて追風に、不断の香の炉に似たり。
匂も音も夕空に、とうとうたらり、とうたらり、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈よ。

花は薫じて追風に、不断の香の炉に似たり。
痍に悩める胸もどき、ヴィオロン楽の清掻や、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈よ、
神輿の台をさながらの雲悲みて艶だちぬ。

痍に悩める胸もどき、ヴィオロン楽の清掻や、
闇の涅槃に、痛ましく悩まされたる優心。
神輿の台をさながらの雲悲みて艶だちぬ、
日や落入りて溺るゝは、凝るゆふべの血潮雲。

闇の涅槃に、痛ましく悩まされたる優心、
光の過去のあとかたを尋めて集むる憐れさよ。
日や落入りて溺るゝは、凝るゆふべの血潮雲、
君が名残のたゞ在るは、ひかり輝く聖体盒。

破鐘

シャルル・ボドレエル

悲しくもまたあはれなり、冬の夜の地炉の下に、
燃えあがり、燃え尽きにたる柴の火に耳傾けて、
夜霧だつ闇夜の空の寺の鐘、きゝつゝあれば、
過ぎし日のそこはかとなき物思ひやをら浮びぬ。

喉太の古鐘きけば、その身こそうらやましけれ。
老らくの齢にもめげず、健やかに、忠なる声の、
何時もいつも、梵音妙に深くして、穏どかなるは、
陣営の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ。鬱憂のすさびごこちに、
寒空の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、
覚束な、音にこそたてれ、弱声の細音も哀れ、

哀れなる臨終の声は、血の波の湖の岸、
小山なす屍の下に、身動もえならで死する、
棄てられし負傷の兵の息絶ゆる終の呻吟か。

人と海

シャルル・ボドレエル

こゝろ自由なる人間は、とはに賞づらむ大海を。
海こそ人の鏡なれ。灘の大波はてしなく、
水や天なるゆらゆらは、うつし心の姿にて、
底ひも知らぬ深海の潮の苦味も世といづれ。

さればぞ人は身を映す鏡の胸に飛び入りて、
眼に抱き腕にいだき、またある時は村肝の
心もともに、はためきて、潮騒高く湧くならむ、
寄せてはかへす波の音の、物狂ほしき歎息に。

海も爾もひとしなみ、不思議をつゝむ陰なりや。
人よ、爾が心中の深淵探りしものやある。
海よ、爾が水底の富を数へしものやある。
かくも妬げに秘事のさはにもあるか、海と人。

かくて劫初の昔より、かくて無数の歳月を、
慈悲悔恨の弛無く、修羅の戦酣に、
げにも非命と殺戮と、なじかは、さまで好もしき、
噫、永遠のすまうどよ、噫、怨念のはらからよ。

梟

シャルル・ボドレエル

黒葉水松の木下闇に
並んでとまる梟は
昔の神をいきうつし、
赤眼むきだし思案顔。

体も崩さず、ぢつとして、
なにを思ひに暮がたの
傾く日脚推しこかす
大凶時となりにけり。

鳥のふりみて達人は
道の悟や開くらむ、
世に忌々しきは煩悩と。

色相界の妄執に
諸人のつねのくるしみは
居に安ぜぬあだ心。

現代の悲哀はボドレエルの詩に異常の発展を遂げたり。人或は一見して云はむ、これ僅に悲哀の名を変じて鬱悶と改めしのみと、しかも再考して終にその全く変質したるを暁らむ。ボドレエルは悲哀に誇れり。即ちこれを詩章の竜蓋帳中に据ゑて、黒衣聖母の観あらしめ、絢爛なること絵画の如き幻想と、整美なること彫塑に似たる夢思とを恣にしてこれに生動の気を与ふ。ここに於てか、宛もこれ絶美なる獅身女頭獣なり。悲哀を愛するの甚しきは、いづれの先人をも凌ぎ、常に悲哀の詩趣を讃して、彼は自ら「悲哀の煉金道士」と号せり。

＊

先人の多くは、悩心地定かならぬままに、自然に対する心中の愁訴を、自然その物に捧げて、尋常の失意に泣けども、ボドレエルは然らず。彼は都府の子なり。乃ち巴里叫喊地獄の詩人として胸奥の悲を述べ、人に叛き世に抗する数奇の放浪児が為に、大声を仮したり。その心、夜に似て暗憺、いひしらず汚れにたれど、また一種の美、たとへば、濁江の底なる眼、哀憐悔恨の凄光を放つが如きもの無きにしもあらず。

エミイル・ヴェルハアレン

ボドレエル氏よ、君は芸術の天にたぐひなき凄惨の光を与へぬ。即ち未だ曾てなき一の戦慄を創成したり。

ヴィクトル・ユウゴオ

譬喩

ポオル・ヴェルレエヌ

主は讃むべき哉、無明の闇や、憎多き
今の世にありて、われを信徒となし給ひぬ。
願はくは吾に与へよ、力と沈勇とを。
いつまでも永く狗子のやうに従ひてむ。

生贄の羊、その母のあと、従ひつつ、
何の苦もなくて、牧草を食み、身に生ひたる
羊毛のほかに、その刻来ぬれば、命をだに
惜まずして、主に奉る如くわれもなさむ。

また魚とならば、御子の頭字象りもし、
驢馬ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ、
はた、わが肉より禳ひ給ひし豕を見いづ。

げに末つ世の反抗表裏の日にありては
人間よりも、畜生の身ぞ信深くて
心素直にも忍辱の道守るならむ。

よくみるゆめ　　ポオル・ヴェルレエヌ

常によく見る夢ながら、奇やし、懐かし、身にぞ染む。
曾ても知らぬ女なれど、思はれ、思ふかの女よ。
夢見る度のいつもいつも、同じと見れば、異りて、
また異らぬおもひびと、わが心根や悟りてし。

わが心根を悟りてしかの女の眼に胸のうち、
噫、彼女にのみ内証の秘めたる事ぞなかりける。
蒼ざめ顔のわが額、しとゞの汗を拭ひ去り、
涼しくなさむ術あるは、玉の涙のかのひとよ。

栗色髪のひとなるか、赤髪のひとか、金髪か、
名をだに知らね、唯思ふ朗ら細音のうまし名は、
うつせみの世を疾く去りし昔の人の呼名かと。

つくづく見入る眼差は、匠が彫りし像の眼か、
澄みて、離れて、落居たる其音声の清しさに、
無言の声の懐かしき恋しき節の鳴り響く。

落葉

ポオル・ヴェルレエヌ

秋の日の
ヴィオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな。

仏蘭西（フランス）の詩はユウゴオに絵画の色を帯び、ルコント・ドゥ・リイルに彫塑の形を具（そな）へ、ヴェルレエヌに至りて音楽の声を伝へ、而して又更に陰影の匂なつかしきを捉（とら）へむとす。

訳者

良心

ヴィクトル・ユウゴオ

革衣纏へる児等を引具して
髪おどろ色蒼ざめて、降る雨を、
エホバよりカインは離り迷ひいで、
夕闇の落つるがまゝに愁然と、
大原の山の麓にたどりつきぬ。
妻は倦み児等も疲れて諸声に、
「地に伏していざ、いのねむ」と語りけり。
山陰にカインはいねず、夢おぼろ、
烏羽玉の暗夜の空を仰ぎみれば、
広大の天眼くわつと、かしこくも、
物陰の奥より、ひしと、みいりたるに、
わなゝきて「未だ近し」と叫びつつ、
倦みし妻、眠れる児等を促して、
もくねんと、ゆくへも知らに逃れゆく。
かゝなべて、日には三十日、夜は、三十夜、
色変へて、風の音にもをのゝきぬ。
やらはれの、伏眼の旅は果もなし、
眠なく休ひもえせで、はろばろと、
後の世のアシュルの国、海のほとり、
荒磯にこそはつきにけれ。「いざ、こゝにとゞまらむ。この世のはてに今ぞ来し、
いざ」と、いへば、陰雲暗きめぢのあなた、
いつも、いつも、天眼ひしと睨みたり。
おそれみに身も世もあらず、戦きて、
「隠せよ」と叫ぶ一声。児等はただ
猛き親を口に指あて眺めたり。
沙漠の地、毛織の幕に住居する
後の世のうからのみおやヤバルにぞ
「このむたに幕ひろげよ」と命ずれば、
ひるがへる布の高壁めぐらして
鉛もて地に固むるに、金髪の
孫むすめ曙のチラは語りぬ。
「かくすれば、はや何も見給ふまじ」と。
「否なほも眼睨む」とカインいふ。
角を吹き鼓をうちて、城のうちを
ゆきめぐる民草のおやユバルいふ、
「おのれ今固き守や設けむ」と。
銅の壁築き上げて父の身を、
そがなかに隠しぬれども、如何せむ、
「いつも、いつも眼睨む」といらへあり。
「恐しき塔をめぐらし、近よりの
難きやうにすべし。砦守る城築あげて、
その邑を固くもらむ」と、エノクいふ。
鍛冶の祖トバルカインは、いそしみて、
宏大の無辺都城を営むに、
同胞は、セツの児等、エノスの児等を、
野辺かけて狩暮しつゝ、ある時は

旅人の眼をくりて、夕されば
星天に征矢を放ちぬ。これよりぞ、
花崗石、帳に代り、くろがねを
石にくみ、城の形、冥府に似たる
塔影は野を暗うして、その壁ぞ
山のごと厚くなりける。工成りて
戸を固め、壁建終り、大城戸に
刻める文字を眺むれば「このうちに
神はゆめ入る可からず」と、ゑりにたり。
さて親は石殿に住はせたれど、
憂愁のやつれ姿ぞいぢらしき。
「おほぢ君、眼は消えしや」と、チラの問へば、
「否、そこに今もなほ在り」と、カインいふ。
「墳塋に寂しく眠る人のごと、
地の下にわれは住はむ。何物も
われを見じ、吾も亦何をも見じ」と。
さてこゝに坑を穿てば「よし」といひて、
たゞひとり闇穴道におりたちて、
物陰の座にうちかくる、ひたおもて、
地下の戸を、はたと閉づれば、こはいかに、
天眼なほも奥津城にカインを眺む。

ユウゴオの趣味は典雅ならず、性情奔放にして狂※激浪の如くなれど、温藉静冽の気自からその詩を貫きたり。対聯比照に富み、光彩陸離たる形容の文辞を畳用して、燦爛たる一家の詩風を作りぬ。

訳者

礼拝

フランソア・コペエ

さても千八百九年、サラゴサの戦、
われ時に軍曹なりき。此日惨憺を極む。
街既に落ちて、家を囲むに、
閉ぢたる戸毎に不順の色見え、
鉄火、窓より降りしきれば、
「憎つくき僧徒の振舞」と
かたみに低く罵りつ。
明方よりの合戦に
眼は硝煙に血走りて、
舌には苦がき紙筒を
噛み切る口の黒くとも、
奮闘の気はいや益しに、
勢猛に追ひ迫り、
黒衣長袍ふち広き帽を狙撃す。
狭き小路の行進に
とざま、かうざま顧みがち、
われ軍曹の任にしあれば、
精兵従へ推しゆく折りしも、
忽然として中天赤く、
鉱炉の紅舌さながらに、
虐殺せらるゝ婦女の声、
遙かには轟々の音とよもして、
歩毎に伏屍累々たり。
屈でくゞる軒下を
出でくる時は銃剣の
鮮血淋漓たる兵が、
血紅に染みし指をもて、
壁に十字を書置くは、
敵潜めるを示すなり。
鼓うたせず、足重く、
将校たちは色曇り、
さすが、手練の旧兵も、
落居ぬけはひに、寄添ひて、
新兵もどきの胸さわぎ。

忽ち、とある曲角に、
援兵と呼ぶ仏語の一声、
それ、戦友の危急ぞと、
駆けつけ見れば、きたなしや、
日常は猛けき勇士等も、
精舎の段の前面に
たゞ僧兵の二十人、
円頂の黒鬼に、くひとめらる。
真白の十字胸につけ、
靴無き足の凛々しさよ、
血染の腕巻きあげて、
大十字架にて、うちかゝる。

慘絶、壯絶。それと一斉射撃にて、
やがては掃蕩したりしが、
冷然として、残忍に、軍は倦みたり。
皆心中に疾しくて、
とかくに殺戮したれども、
醜行已に為し了はり、
密雲漸く散ずれば、
積みかさなれる屍より
階かけて、紅流れ、
そのうしろ楼門聳ゆ、巍然として鬱たり。

燈明くらがりに金色の星ときらめき、
香炉かぐはしく、静寂の香を放ちぬ。
殿上、奥深く、神壇に対ひ、
歌楼のうち、やさけびの音しらぬ顔、
蕭やかに勤行営む白髪長身の僧。
噫けふもなほ俤にして浮びこそすれ。
モオル廻廊の古院、
黒衣僧兵のかばね、
天日、石だたみを照らして、
紅流に烟たち、
朧々たる低き戸の框に、
立つや老僧。
神壇龕のやうに輝き、
唖然としてすくみしわれらのうつけ姿。

げにや当年の己は
空恐ろしくも信心無く、
或日 精舎の奪掠に
負けじ心の意気張づよく
神壇近き御燈に
煙草つけたる乱行者、
上反鬚に気負みせ、
一歩も譲らぬ気象のわれも、
たゞ此僧の髪白く白く
神寂びたるに畏みぬ。

「打て」と士官は号令す。
誰有て動く者無し。
僧は確に聞きたらむも、
さあらぬ素振神々しく、
聖水大盤を捧げてふりむく。
ミサ礼拝半に達し、
司僧むき直る祝福の時、
腕は伸べて鶴翼のやう、
衆皆一歩たじろきぬ。
僧はすこしもふるへずに
信徒の前に立てるやう、
妙音澱なく、和讃を咏じて、
「帰命頂礼」の歌、常に異らず、

声もほがらに、
「全能の神、爾等を憐み給ふ。」
またもや、一声あらゝかに
「うて」と士官の号令に
進みいでたる一卒は
隊中有名の卑怯者、
銃執りなほして発砲す。
老僧、色は蒼みしが、
沈勇の眼明らかに、
祈りつゞけぬ、
「父と子と」
続いて更に一発は、
狂気のさたか、血迷か、
とかくに業は了りたり。
僧は隻腕、壇にもたれ、
明いたる手にて祝福し、
黄金盤も重たげに、
虚空に恩赦の印を切りて、
音声こそは微なれ、
閧たる堂上とほりよく、
瞑目のうち述ぶるやう、
「聖霊と。」
かくて仆れぬ、礼拝の事了りて。
盤は三度び、床上に跳りぬ。
事に慣れたる老兵も、
胸に鬼胎をかき抱き
足に兵器を投げ棄てて
われとも知らず膝つきぬ、
醜行のまのあたり、
殉教僧のまのあたり。
聊爾なりや「アアメン」と
うしろに笑ふ、わが隊の鼓手。

わすれなぐさ　ウィルヘルム・アレント

ながれのきしのひともとは、
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、くちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく。

山のあなた

カアル・ブッセ

山のあなたの空遠く
「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。
噫(ああ)、われひとゝ尋(と)めゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。

春

パウル・バルシュ

森は今、花さきみだれ
艶(えん)なりや、五月(さつき)たちける。
神よ、擁護(おうご)をたれたまへ、
あまりに幸(さち)のおほければ。

やがてぞ花は散りしぼみ、
艶(えん)なる時も過ぎにける。
神よ擁護(おうご)をたれたまへ、
あまりにつらき災(とが)な来(こ)そ。

秋

オイゲン・クロアサン

けふつくづくと眺むれば、
悲の色口にあり。
たれもつらくはあたらぬを、
なぜに心の悲める。

秋風わたる青木立
葉なみふるひて地にしきぬ。
きみが心のわかき夢
秋の葉となり落ちにけむ。

わかれ

ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル

ふたりを「時」がさきしより、
昼は事なくうちすぎぬ。
よろこびもなく悲まず、
はたたれをかも怨むべき。

されど夕闇おちくれて、
星の光のみゆるとき、
病の床のちごのやう、
心かすかにうめきいづ。

水無月（みなづき）

テオドル・ストルム

子守歌風に浮びて、
暖かに日は照りわたり、
田の麦は足穂（たりほ）うなだれ、
茨（いばら）には紅き果（み）熟し、
野面（のもせ）には木の葉みちたり。
いかにおもふ、わかきをみなよ。

花のをとめ

ハインリッヒ・ハイネ

妙(たへ)に清らの、あゝ、わが児(こ)よ、
つくづくみれば、そゞろ、あはれ、
かしらや撫でゝ、花の身の
いつまでも、かくは清らなれと、
いつまでも、かくは妙にあれと、
いのらまし、花のわがめぐしご。

ルビンスタインのめでたき楽譜に合せて、ハイネの名歌を訳したり。原の意を汲(く)みて余さじと、つとめ、はた又、句読停音すべて楽譜の示すところに従ひぬ。

訳者

瞻望　　ロバアト・ブラウニング

怕るゝか死を。――喉塞ぎ、
　おもわに狭霧、
深雪降り、木枯荒れて、著るくなりぬ、
　すゑの近さも。
夜の稜威暴風の襲来、恐ろしき
　敵の屯に、
現身の「大畏怖」立てり。しかすがに
　猛き人は行かざらめやも。
それ、旅は果て、峯は尽きて、
　障礙は破れぬ、
唯、すゑの誉の酬えむとせば、
　なほひと戦。
戦は日ごろの好、いざさらば、
　終の晴の勝負せむ。
なまじひに眼ふたぎて、赦るされて、
　這ひ行くは憂し、
否残なく味ひて、かれも人なる
　いにしへの猛者たちのやう、
矢表に立ち楽世の寒冷、苦痛、暗黒の
　貢のあまり捧げてむ。
そも勇者には、忽然と禍福に転ずべく
　闇は終らむ。
四大のあらび、忌々しかる羅刹の怒号、
　ほそりゆき、雑りけち
変化して苦も楽とならむとやすらむ。
　そのとき光明、その時御胸
あはれ、心の心とや、抱きしめてむ。
　そのほかは神のまにまに。

出現　　ロバアト・ブラウニング

苔(こけ)むしろ、飢ゑたる岸も
　春来れば、
つと走る光、そらいろ、
　菫(すみれ)咲く。

村雲のしがむみそらも、
　こゝかしこ、
やれやれて影はさやけし、
　ひとつ星。

うつし世の命を恥(はぢ)の
　めぐらせど、
こぼれいづる神のゑまひか、
　君がおも。

岩陰に

ロバアト・ブラウニング

一

嗚呼、物古りし鳶色の「地」の微笑の大きやかに、
親しくもあるか、今朝の秋、偃曝に其骨を
延し横へ、膝節も、足も、つきいでて、漣の
悦び勇み、小躍に越ゆるがまゝに浸たりつゝ、
さて欹つる耳もとの、さゞれの床の海雲雀、
和毛の胸の白妙に囀ずる声のあはれなる。

二

この教こそ神ながら旧るき真の道と知れ。
翁びし「地」の知りて笑む世の試ぞかやうなる。
愛を捧げて価値あるものゝみをこそ愛しなば、
愛は完たき益にして、必らずや、身の利とならむ。
思の痛み、苦みに卑しきこゝろ清めたる
なれ自らを地に捧げ、酬は高き天に求めよ。

春の朝

ロバアト・ブラウニング

時は春、
日は朝（あした）、
朝は七時、
片岡（かたをか）に露みちて、
揚雲雀（あげひばり）なのりいで、
蝸牛（かたつむり）枝（えだ）に這（は）ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

至上善　　ロバアト・ブラウニング

蜜蜂の嚢にみてる一歳の香も、花も、
宝玉の底に光れる鉱山の富も、不思議も、
阿古屋貝映し蔵せるわだつみの陰も、光も、
香、花、陰、光、富、不思議及ぶべしやは、
　玉よりも輝く真、
　珠よりも澄みたる信義、
天地にこよなき真、澄みわたる一の信義は
　をとめごの清きくちづけ。

ブラウニングの楽天説は、既に二十歳の作「ポオリイン」に顕れ、「ピパ」の歌、「神、そらにしろしめす、すべて世は事も無し」といふ句に綜合せられたれど、一生の述作皆人間終極の幸福を予言する点に於て一致し「アソランドオ」絶筆の結句に至るまで、彼は有神論、霊魂不滅説に信を失はざりき。この詩人の宗教は基督教を元としたる「愛」の信仰にして、尋常宗門の繩墨を脱し、教外の諸法に対しては極めて宏量なる態度を持せり。神を信じ、その愛とその力とを信じ、これを信仰の基として、人間恩愛の神聖を認め、精進の理想を妄なりとせず、芸術科学の大法を疑はず、又人心に善悪の奮闘争閧あるを、却て進歩の動機なりと思惟せり。而してあらゆる宗教の教義には重を措かず、ただ基督の出現を以て説明すべからざる一の神秘となせるのみ。曰く、宗教にして、若し、万世不易の形を取り、万人の為め、予め、劃然として具へられたらむには、精神界の進歩は直に止りて、厭ふべき凝滞はやがて来らむ。人間の信仰は定かならぬこそをかしけれ、教法に完了といふ義ある可からずと。されば信教の自由を説きて、寛容の精神を述べたるもの、「聖十字架祭」の如きあり。殊に晩年に※みて、教法の形式、制限を脱却すること益著るしく、全人類にわたれる博愛同情の精神愈盛なりしかど、一生の確信は終始毫も渝ること無かりき。人心の憧がれ向ふ高大の理想は神の愛なりといふ中心思想を基として、幾多の傑作あり。「クレオン」には、芸術美に倦みたる希臘詩人の永生に対する熱望の悲音を聞くべく、「ソオル」には事業の永続に不老不死の影ばかりなるを喜ぶ事のはかなき夢なるを説きて、更に個人の不滅を断言す。「亜剌比亜の医師カアシッシュの不思議なる医術上の経験」といふ尺牘体には、基督教の原始に遡りて、意外の側面に信仰の光明を窺ひ、「砂漠の臨終」には神の権化を目撃せし聖約翰の遺言を耳にし得べし。然れどもこれ等の信仰は、盲目なる狂熱の独断にあらず、皆冷静の理路を辿り、若しくは、精練、微を穿てる懐疑の坩堝を経たるものにして「監督ブルウグラムの護法論」「フェリシュタアの念想」等これを証す。これを綜ぶるに、ブラウニングの信仰は、精神の難関を凌ぎ、疑惑を排除して、光明の世界に達したるものにして永年の大信は世を終るまで動かざりき。「ラ・セイジヤス」の秀什、この想を述べて余あり、又、千八百六十四年の詩集に収めたる「瞻望」の歌と、千八百八十九年の詩集「アソランドオ」の絶筆とはこの詩人が宗教観の根本思想を包含す。　訳者

花くらべ

ウィリアム・シェイクスピヤ

燕も来ぬに水仙花、
大寒こさむ三月の
風にもめげぬ凛々しさよ。
またはジュノウのまぶたより、
ヴィイナス神の息よりも
なほ臈たくもありながら、
菫の色のおぼつかな。
照る日の神も仰ぎえで
嫁ぎもせぬに散りはつる
色蒼ざめし桜草、
これも少女の習かや。
それにひきかへ九輪草、
編笠早百合気がつよい。
百合もいろいろあるなかに、
鳶尾草のよけれども、
あゝ、今は無し、しよんがいな。

花の教

クリスティナ・ロセッティ

心をとめて窺へば花自ら教あり。
朝露の野薔薇のいへる、
「艶なりや、われらの姿、
刺に生ふる色香とも知れ。」
麦生のひまに罌粟のいふ、
「せめては紅きはしも見よ、
そばめられたる身なれども、
験ある露の薬水を
盛りさゝげたる盃ぞ。」
この時、百合は追風に、
「見よ、人、われは言葉なく
法を説くなり。」
みづからなせる葉陰より、
声もかすかに菫草、
「人はあだなる香をきけど、
われらの示す教暁らじ。」

小曲

ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ

小曲は刹那をとむる銘文、また譬ふれば、
過ぎにしも過ぎせぬ過ぎしひと時に、劫の「心」の
捧げたる願文にこそ。光り匂ふ法の会のため、
祥もなき預言のため、折からのけぢめはあれど、
例も例も堰きあへぬ思豊かにて切にあらなむ。
「日」の歌は象牙にけづり、「夜」の歌は黒檀に彫り、
頭なる華のかざしは輝きて、阿古屋の珠と、
照りわたるきらびの栄の臈たさを「時」に示せよ。

小曲は古泉の如く、そが表、心あらはる、
うらがねをいづれの力しろすとも。あるは「命」の
威力あるもとめの貢、あるはまた貴に妙なる
「恋」の供奉にかづけの纏頭と贈らむも、よし 遮 莫
三瀬川、船はて処、陰暗き伊吹の風に、
「死」に払ふ渡のしろと、船人の掌にとらさむも。

恋の玉座　　ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ

心のよしと定めたる「力」かずかず、たぐへみれば、
「真」の唇はかしこみて「望」の眼、天仰ぎ
「誉」は翼、音高に埋火の「過去」煽ぎぬれば
飛火の焔、紅々と炎上のひかり忘却の
去なむとするを驚し、飛び翔けるをぞ控へたる。
また後朝に巻きまきし玉の柔手の名残よと、
黄金くしげのひとすぢを肩に残しゝ「若き世」や
「死出」の挿頭と、例も例もあえかの花を編む「命」。

「恋」の玉座は、さはいへど、そこにしも在じ、空遠く、
逢瀬、別の辻風のたち迷ふあたり、離りたる
夢も通はぬ遠つぐに、無言の局奥深く、
設けられたり。たとへそれ、「真」は「恋」の真心を
夙に知る可く、「望」こそを預言し、「誉」こそ
そがためによく、「若き世」めぐし、「命」惜しとも。

春の貢　　ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ

草うるはしき岸の上に、いと美はしき君が面、
われは横へ、その髪を二つにわけてひろぐれば、
うら若草のはつ花も、はな白みてや、黄金なす
みぐしの間のこゝかしこ、面映げにも覗くらむ。
去年とやいはむ今年とや年の境もみえわかぬ
けふのこの日や「春」の足、半たゆたひ、小李の
葉もなき花の白妙は雪間がくれに迷はしく、
「春」住む庭の四阿屋に風の通路ひらけたり。

されど卯月の日の光、けふぞ谷間に照りわたる。
仰ぎて眼閉ぢ給へ、いざくちづけむ君が面、
水枝小枝にみちわたる「春」をまなびて、わが恋よ、
温かき喉、熱き口、ふれさせたまへ、けふこそは、
契もかたきみやづかへ、恋の日なれや。冷かに
つめたき人は永久のやらはれ人と貶し憎まむ。

心も空に　　ダンテ・アリギエリ

心も空に奪はれて物のあはれをしる人よ、
今わが述ぶる言の葉の君の傍に近づかば
心に思ひ給ふこと応へ給ひね、洩れなくと、
綾に畏こき大御神「愛」の御名もて告げまつる。

さても星影きらゝかに、更け行く夜も三つ一つ
ほとほと過ぎし折しもあれ、忽ち四方は照渡り、
「愛」の御姿うつそ身に現はれいでし不思議さよ。
おしはかるだに、その性の恐しときく荒神も

御気色いとゞ麗はしく在すが如くおもほえて、
御手にはわれが心の臓、御腕には貴やかに
あえかの君の寝姿を、衣うちかけて、かい抱き、

やをら動かし、交睫の醒めたるほどに心の臓、
さゝげ進むれば、かの君も恐る恐るに聞しけり。
「愛」は乃ち馳せ去りつ、馳せ走りながら打泣きぬ。

鷺の歌

エミイル・ヴェルハアレン

ほのぐらき黄金隠沼、
骨蓬の白くさけるに、
静かなる鷺の羽風は
徐に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ、
広ごりて、ころもに似たり。
天なるや、鳥の通路、
羽ばたきの音もたえだえ。

漁子のいと賢しらに
清らなる網をうてども、
空翔ける奇しき翼の
おとなひをゆめだにしらず。

また知らず日に夜をつぎて
溝のうち泥土の底
鬱憂の網に待つもの
久方の光に飛ぶを。

ボドレエルにほのめきヴェルレエヌに現はれたる詩風はここに至りて、終に象徴詩の新体を成したり。この「鷺の歌」以下、「嗟嘆」に至るまでの詩は多少皆象徴詩の風格を具ふ。

訳者

法の夕

エミイル・ヴェルハアレン

夕日の国は野も山も、その「平安」や「寂寥」の
黝の色の毛布もて掩へる如く、物寂びぬ。
万物凡て整ふり、折りめ正しく、ぬめらかに、
物の象も筋めよく、ビザンチン絵の式の如。

時雨村雨、中空を雨の矢数につんざきぬ。
見よ、一天は紺青の伽藍の廊の色にして、
今こそ時は西山に入日傾く夕まぐれ、
日の金色に烏羽玉の夜の白銀まじるらむ。

めぢの界に物も無し、唯遠長き並木路、
路に沿ひたる樫の樹は、巨人の列の佇立、
疎らに生ふる箒木や、新墾小田の末かけて、
鋤休めたる野らまでも領ずる顔の姿かな。

木立を見れば沙門等が野辺の送の営に、
夕暮がたの悲を心に痛み歩むごと、
また古の六部等が後世安楽の願かけて、
霊場詣、杖重く、番の御寺を訪ひしごと。

赤々として暮れかゝる入日の影は牡丹花の
眠れる如くうつろひて、河添馬道開けたり。

噫、冬枯や、法師めくかの行列を見てあれば、
たとしへもなく静かなる夕の空に二列、

瑠璃の御空の金砂子、星輝ける神前に
進み近づく夕づとめ、ゆくてを照らす星辰は
壇に捧ぐる御明の大燭台の心にして、
火こそみえけれ、其棹の閻浮提金ぞ隠れたる。

水かひば

エミイル・ヴェルハアレン

ほらあなめきし落窪(おちくぼ)の、
夢も曇るか、こもり沼(ぬ)は、
腹しめすまで浸りたる
まだら牡牛の水かひ場(ば)。

坂くだりゆく牧(まき)がむれ、
牛は練(ね)りあし、馬は※(だく)、
時しもあれや、落日に
嘯(うそぶ)き吼(ほ)ゆる黄牛(あめうし)よ。

日のかぐろひの寂寞(じやくまく)や、
色も、にほひも、日のかげも、
梢(こずゑ)のしづく、夕栄(ゆふばえ)も。

靄(もや)は刈穂(かりほ)のはふり衣(ぎぬ)、
夕闇とざす路遠(みち)み、
牛のうめきや、断末魔。

畏怖　　エミイル・ヴェルハアレン

北に面へるわが畏怖の原の上に、
牧羊の翁、神楽月、角を吹く。
物憂き羊小舎のかどに、すぐだちて、
災殃のごと、死の羊群を誘ふ。

きし方の悔をもて築きたる此小舎は
かぎりもなき、わが憂愁の邦に在りて、
ゆく水のながれ薄荷荚※におほはれ、
いざよひの波も重きか、蜘手に澱む。

肩に赤十字ある墨染の小羊よ、
色もの凄き羊群も長棹の鞭に
撻れて帰る、たづたづし、罪のねりあし。

疾風に歌ふ牧羊の翁、神楽月よ、
今、わが頭掠めし稲妻の光に
この夕おどろおどろしきわが命かな。

火宅

エミイル・ヴェルハアレン

嗚呼、爛壊せる黄金の毒に中りし大都会、
石は叫び烟舞ひのぼり、
驕慢の円蓋よ、塔よ、直立の石柱よ、
虚空は震ひ、労役のたぎち沸くを、
好むや、汝、この大畏怖を、叫喚を、
あはれ旅人、
悲みて夢うつら離りて行くか、濁世を、
つゝむ火焔の帯の停車場。

中空の山けたゝまし跳り過ぐる火輪の響。
ながき胸を焦す早鐘、陰々と、とよもす音も、
この夕、都会に打ちぬ。炎上の焔、赤々、
千万の火粉の光、うちつけに面を照らし、
声黒きわめき、さけびは、妄執の心の矢声。
満身すべて涜聖の言葉に捩れ、
意志あへなくも狂瀾にのまれをはんぬ。
実に自らを矜りつゝ、将、咀ひぬる、あはれ、人の世。

時鐘

エミイル・ヴェルハアレン

館の闇の静かなる夜にもなれば訝しや、
廊下のあなた、かたことゝ、※杖のおと、杖の音、
「時」の階のあがりおり、小股に刻む音なひは
　これや時鐘の忍足。

硝子の蓋の後には、白鑞の面飾なく、
花形模様色褪めて、時の数字もさらぼひぬ。
人の気絶えし渡殿の影ほのぐらき朧月よ、
　これや時鐘の眼の光。

うち沈みたるねび声に機のおもり、音ひねて、
槌に鑢の音もかすれ、言葉悲しき木の函よ、
細身の秒の指のおと、片言まじりおぼつかな、
　これや時鐘の針の声。

角なる函は樫づくり、焦茶の色の框はめて、
冷たき壁に封じたる棺のなかに隠れすむ
「時」の老骨、きしきしと、数噛む音の歯ぎしりや、
　これぞ時鐘の恐ろしさ。

げに時鐘こそ不思議なれ。
あるは、木履を曳き悩み、あるは徒跣に音を窃み、
忠々しくも、いそしみて、古く仕ふるはした女か。
柱時鐘を見詰むれば、針のコムパス、身の搾木。

黄昏

ジョルジュ・ロオデンバッハ

夕暮がたの蕭やかさ、燈火無き室の蕭やかさ。
かはたれ刻は蕭やかに、物静かなる死の如く、
朧々の物影のやをら浸み入り広ごるに、
まづ天井の薄明、光は消えて日も暮れぬ。

物静かなる死の如く、微笑作るかはたれに、
曇れる鏡よく見れば、別の手振うれたくも
わが俤は蕭やかに辷り失せなむ気色にて、
影薄れゆき、色蒼み、絶えなむとして消つべきか。

壁に掲けたる油画に、あるは朧に色褪めし、
框をはめたる追憶の、そこはかとなく留まれる
人の記憶の図の上に心の国の山水や、
筆にゑがける風景の黒き雪かと降り積る。

夕暮がたの蕭やかさ。あまりに物のねびたれば、
沈める音の絃の器に、※をかけたる思にて、
無言を辿る恋なかの深き二人の眼差も、
花毛氈の唐草に絡みて縒るゝ夢心地。

いと徐ろに日の光陰ろひてゆく蕭やかさ。
文目もおぼろ、蕭やかに、噫、蕭やかに、つくねんと、
沈黙の郷の偶座は一つの香にふた色の
匂交れる思にて、心は一つ、えこそ語らね。

銘文

アンリ・ドウ・レニエ

夕まぐれ、森の小路の四辻に
夕まぐれ、風のもなかの逍遙に、
竈の灰や、歳月に倦み労れ来て、
定業のわが行末もしらま弓、
杖と佇む。

路のゆくてに「日」は多し、
今更ながら、行きてむか。
ゆふべゆふべの旅枕、
水こえ、山こえ、夢こえて、
つひのやどりはいづかたぞ。
そは玄妙の、静寧の「死」の大神が、
わがまなこ、閉ぢ給ふ国、
黄金の、浦安の妙なる封に。

高樫の寂寥の森の小路よ。
岩角に懈怠よろぼひ、
きり石に足弱悩み、
歩む毎、
きしかたの血潮流れて、
木枯の颯々たりや、高樫に。
噫、われ倦みぬ。

赤楊の落葉の森の小路よ。
道行く人は木葉なす、
蒼ざめがほの恥のおも、
ぬかりみ迷ひ、群れゆけど、
かたみに避けて、よそみがち。
泥濘の、したゝりの森の小路よ、
憂愁を風は葉並に囁きぬ。
しろがねの、月代の霜さゆる隠沼は
たそがれに、この道のはてに澱みて
げにこゝは「鬱憂」の
鬼が栖む国。

秦皮の、真砂、いさごの、森の小路よ、
微風も足音たてず、
梢より梢にわたり、
山蜜の色よき花は
金色の砂子の光、
おのづから曲れる路は
人さらになぞへを知らず、
このさきの都のまちは
まれびとを迎ふときゝぬ。
いざ足をそこに止めむか。
あなくやし、われはえゆかじ。
他の生の途のかたはら、

「物影」の亡骸守る
わが「願」の通夜を思へば。

高樫の路われはゆかじな、
秦皮や、赤楊の路、
日のかたや、都のかたや、水のかた、
なべてゆかじな。
噫、小路、
血やにじむわが足のおと、
死したりと思ひしそれも、
あはれなり、もどり来たるか、
地響のわれにさきだつ。

噫、小路、
安逸の、醜辱の、驕慢の森の小路よ、
あだなりしわが世の友か、吹風は、
高樫の木下蔭に
声はさやさや、
涙さめざめ。

あな、あはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、
あな、あはれ、あすゆゑに、夕暮苦し、
あな、あはれ、身のゆゑに、夕暮重し。

愛の教　　アンリ・ドゥ・レニエ

いづれは「夜」に入る人の
をさな心も青春も、
今はた過ぎしけふの日や、
従容として、ひとりきく、
「冬篳篥」にさきだちて、
「秋」に響かふ「夏笛」を。
（現世にしては、ひとつなり、
物のあはれも、さいはひも。）
あゝ、聞け、楽のやむひまを
「長月姫」と「葉月姫」、
ながら「憂愁」と「歓楽」と
語らふ声の蕭やかさ。
（熟しうみたるくだものゝ
つはりて枝や撓むらむ。）
あはれ、微風、さやさやと
伊吹のすゑは木枯を
誘ふと知れば、憂かれども、
けふ木枯もそよ風も
口ふれあひて、熟睡せり。
森蔭はまだ夏緑、
夕まぐれ、空より落ちて、
笛の音は山鳩よばひ、
「夏」の歌「秋」を揺りぬ。
曙の美しからば、
その昼は晴れわたるべく、
心だに優しくあらば、
身の夜も楽しかるらむ。
ほゝゑみは口のさうび花、
もつれ髪、鬢にゆふべく、
真清水やいつも澄みたる。
あゝ人よ、「愛」を命の法とせば、
星や照らさむ、なが足を、
いづれは「夜」に入らむ時。

花冠

アンリ・ドウ・レニエ

途のつかれに項垂れて、
黙然たりや、おもかげの
あらはれ浮ぶわが「想」。
命の朝のかしまだち、
世路にほこるいきほひも、
今、たそがれのおとろへを
透しみすれば、わなゝきて、
顔背くるぞ、あはれなる。
思ひかねつゝ、またみるに、
避けて、よそみて、うなだるゝ、
あら、なつかしのわが「想」。

げにこそ思へ、「時」の山、
山越えいでて、さすかたや、
「命」の里に、もとほりし
なが足音もきのふかな。

さて、いかにせし、盃に
水やみちたる。としごろの
願の泉はとめたるか。
あな空手、唇乾き、
とこしへの渇に苦める
いと冷やき笑を湛へて、
ゆびさせる其足もとに、
玉の屑、埴土のかたわれ。

つぎなる汝はいかにせし、
こはすさまじき姿かな。
そのかみの臈たき風情、
婀竹の、あえかのなれも、
鈍なりや、宴のくづれ、
みだれ髪、肉おきたるみ、
酒の香に、衣もなよびて、
蹈む足も酔ひさまだれぬ。
あな忌々し、とく去ねよ、

さて、また次のなれが面、
みれば麗容うつろひて、
悲、削ぎしやつれがほ、
指組み絞り胸隠す
双の手振の怪しきは、
饐ゑたる血にぞ、怨恨の
毒ながすなるくち蝮を
掩はむためのすさびかな。

また「驕慢」に音づれし
なが獲物をと、うらどふに、

えび染のきぬは、やれさけ、
笏の牙も、ゆがみたわめり。
又、なにものぞ、ほてりたる
もろ手ひろげて「楽欲」に
らうがはしくも走りしは。
酔狂の抱擁酷く
唇を噛み破られて、
満面に爪あとたちぬ。
興ざめたりな、このくるひ、
われを棄つるか、わが「想」
あはれ、恥かし、このみざま、
なれみづからをいかにする。

しかはあれども、そがなかに、
行清きたゞひとり、
きぬもけがれと、はだか身に、
出でゆきしより、けふまでも、
あだし「想」の姉妹と
道異なるか、かへり来ぬ
——あゝ行かばやな——汝がもとに。
法苑林の奥深く
素足の「愛」の玉容に
なれは、ゐよりて、睦みつゝ、
霊華の房を摘みあひて、
うけつ、あたへつ、とりかはし
双の額をこもごもに、
飾るや、一の花の冠。

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤは金工の如くアンリ・ドゥ・レニエは織人の如し。また、譬喩を珠玉に求めむか、彼には青玉黄玉の光輝あり、これには乳光柔き蛋白石の影を浮べ、色に曇るを見る可し。

訳者

延びあくびせよ　フランシス・ヴィエレ・グリフィン

延びあくびせよ、傍に「命」は倦みぬ、
――朝明より夕をかけて熟睡する
　その臈たげさ労らしさ、
　ねむり眼のうまし「命」や。
起きいでよ、呼ばはりて、過ぎ行く夢は
大影の奥にかくれつ。
今にして躊躇なさば、
ゆく末に何の導ぞ。
呼ばはりて過ぎ行く夢は
去りぬ神秘に。

いでたちの旅路の糧を手握りて、
歩もいとゞ速まさる
愛の一念ましぐらに、
急げ、とく行け、
呼ばはりて、過ぎ行く夢は、
夢は、また帰り来なくに、

進めよ、走せよ、物陰に、
畏をなすか、深淵に、
あな、急げ……あゝ遅れたり。
はしけやし「命」は愛に熟睡して、
栲綱の白腕になれを巻く。
――噫遅れたり、呼ばはりて過ぎ行く夢の
いましめもあだなりけりな。
ゆきずりに、夢は嘲る……

さるからに、
むしろ「命」に口触れて
これに生ませよ、芸術を。
無言を祷るかの夢の
教をきかで、無辺なる神に憧るゝ事なくば、
たちかへり、色よき「命」かき抱き、
なれが刹那を長久にせよ。
死の憂愁に歓楽に
霊妙音を生ませなば、
なが亡き後に残りゐて、
はた、さゞめかむ、はた、なかむ、
うれしの森に、春風や
若緑、
去年を繰返の愛のまねぎに。
さればぞ歌へ微笑の栄の光に。

伴奏　　アルベエル・サマン

白銀の筐、柳、菩提樹や、榛の樹や……
水の面に月の落葉よ……

夕の風に櫛けづる丈長髪の匂ふごと、
夏の夜の薫なつかし、かげ黒き湖の上、
水薫る淡海ひらけ鏡なす波のかゞやき。

楫の音もうつらうつらに
夢をゆくわが船のあし。

船のあし、空をもゆくか、
かたちなき水にうかびて

ならべたるふたつの櫂は
「徒然」の櫂「無言」がい。

水の面の月影なして
波の上の楫の音なして
わが胸に吐息ちらばふ。

賦（かぞへうた）

ジァン・モレアス

色に賞（め）でにし紅薔薇（こうそうび）、日にけに花は散りはてゝ、
唐棣花（はねず）色よき若立も、季（とき）ことごとくしめあへず、
そよそよ風の手枕（たまくら）に、はや日数経（ひかずへ）しけふの日や、
つれなき北の木枯に、河氷るべきながめかな。

噫（ああ）、歓楽よ、今さらに、なじかは、せめて争はむ、
知らずや、かゝる雄誥（をたけび）の、世に類無（たぐひ）く烏滸（をこ）なるを、
ゆゑだもなくて、徒（いたづら）に痴（し）れたる思、去りもあへず、
「悲哀」の琴の糸の緒（を）を、ゆし按（あん）ずるぞ無益（むやく）なる。

＊

ゆめ、な語りそ、人の世は悦（よろこび）おほき宴（うたげ）ぞと。
そは愚かしきあだ心、はたや卑しき癡（し）れごこち。
ことに歎くな、現世（うつしよ）を涯（かぎり）も知らぬ苦界（くがい）よと。
益（よう）無き勇（ゆう）の逸気（はやりぎ）は、たゞいち早く悔いぬらむ。

春日（はるひ）霞みて、葦蘆（よしあし）のさゞめくが如、笑みわたれ。
磯浜（いそはま）かけて風騒ぎ波おとなふがごと、泣けよ。
一切の快楽（けらく）を尽し、一切の苦患（くげん）に堪へて、
豊（とよ）の世と称（たた）ふるもよし、夢の世と観（かん）ずるもよし。

＊

死者のみ、ひとり吾に聴く、奥津城処（おくつきどころ）、わが栖家（すみか）。
世の終（をふ）るまで、吾はしも己が心のあだがたき。
亡恩に栄華は尽きむ、里（さと）鴉（がらす）畠（はた）をあらさむ、
収穫（とりいれどき）時の頼（たのみ）なきも、吾はいそしみて種を播（ま）かむ。

ゆめ、自（みづか）らは悲まじ。世の木枯もなにかあらむ。
あはれ侮蔑（ぶべつ）や、誹謗（ひぼう）をや、大凶事（おほまがごと）の迫害（せまり）をや。
たゞ、詩の神の箜篌（くご）の上、指をふるれば、わが楽（がく）の
日毎に清く澄みわたり、霊妙音（れいみょうおん）の鳴るが楽しさ。

＊

長雨空の喪過（はて）ぎて、さすや忽ち薄日影、
冠（かむり）の花葉（はなば）ふりおとす栗の林の枝の上に、
水のおもてに、遅花（おそばな）の花壇の上に、わが眼にも、
照り添ふ匂なつかしき秋の日脚（ひあし）の白みたる。

日よ何の意ぞ、夏花（なつはな）のこぼれて散るも惜からじ、
はた禁（とど）めえじ、落葉（らくえう）の風のまにまに吹き交ふも。
水や曇れ、空も鈍（に）びよ、たゞ悲のわれに在らば、
想（おもひ）はこれに養はれ、心はために勇（ゆう）をえむ。

＊

われは夢む、滄海の天の色、哀深き入日の影を、
わだつみの灘は荒れて、風を痛み、甚振る波を、
また思ふ釣船の海人の子を、巌穴に隠ろふ蟹を、
青眼のネアイラを、グラウコス、プロオティウスを。

又思ふ、路の辺をあさりゆく物乞の漂浪人を、
栖み慣れし軒端がもとに、休ひゐる賤が翁を
斧の柄を手握りもちて、肩かゞむ杣の工を、
げに思ひいづ、鳴神の都の騒擾、村肝の心の痍を。

＊

この一切の無益なる世の煩累を振りすてゝ、
もの恐ろしく汚れたる都の憂あとにして、
終に分け入る森蔭の清しき宿求めえなば、
光も澄める湖の静けき岸にわれは悟らむ。

否、寧われはおほわだの波うちぎはに夢みむ。
幼年の日を養ひし大揺籃のわだつみよ、
ほだしも波の鴎鳥、呼びかふ声を耳にして、
磯根に近き岩枕汚れし眼、洗はばや。

＊

噫いち早く襲ひ来る冬の日、なにか恐るべき。
春の卯月の贈物、われはや、既に尽し果て、
秋のみのりのえびかづら葡萄も摘まず、新麦の
豊の足穂も、他し人、刈り干しにけむ、いつの間に。

＊

けふは照日の映々と青葉高麦生ひ茂る
大野が上に空高く靡びかひ浮ぶ旗雲よ。
和ぎたる海を白帆あげて、朱の曾保船走るごと、
変化乏しき青天をすべりゆくなる白雲よ。

時ならずして、汝も亦近づく暴風の先駆と、
みだれ姿の影黒み蹙める空を翔りゆかむ、
嗚咽、大空の馳使、添はゞや、なれにわが心、
心は汝に通へども、世の人たえて汲む者もなし。

嗟嘆

ステファンヌ・マラルメ

静かなるわが妹、君見れば、想すゞろぐ。
朽葉色に晩秋の夢深き君が額に、
天人の瞳なす空色の君がまなこに、
憧るゝわが胸は、苔古りし花苑の奥、
淡白き吹上の水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨月、清らなる色に曇りて、
時節のきはみなき鬱憂は池に映ろひ
落葉の薄黄なる憂悶を風の散らせば、
いざよひの池水に、いと冷やき綾は乱れて、
ながながし梔子の光さす入日たゆたふ。

物象を静観して、これが喚起したる幻想の裡自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りてこれを示したり。かるが故に、その詩、幽妙を虧き、人をして宛然自から創作する如き享楽無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を没却するものなり。読詩の妙は漸々遅々たる推度の裡に存す。暗示は即ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心状を示さむが為、徐に物象を喚起し、或はこれと逆まに、一の物象を採りて、闡明数番の後、これより一の心状を脱離せしむる事これなり。

ステファンヌ・マラルメ

白楊（はくよう）

テオドル・オオバネル

落日の光にもゆる
白楊（はくよう）の聳（そび）やぐ並木、
谷隈（たにくま）になにか見る、
風そよぐ梢より。

故国

テオドル・オオバネル

小鳥でさへも巣は恋し、
まして青空、わが国よ、
うまれの里の波羅葦増雲（パライソウ）。

海のあなたの　　テオドル・オオバネル

海のあなたの遙けき国へ
いつも夢路の波枕、
波の枕のなくなくぞ、
こがれ憧れわたるかな、
海のあなたの遙けき国へ。

オオバネルは、ミストラル、ルウマニユ等と相結で、十九世紀の前半に近代プロヴァンス語を文芸に用ゐ、南欧の地を風靡（ふうび）したるフェリイブル詩社の翹楚（ぎょうそ）なり。

「故国」の訳に波羅葦増雲（パライソウ）とあるは、文禄慶長年間、葡萄牙（ポルトガル）語より転じて一時、わが日本語化したる基督教法に所謂（いはゆる）天国の意なり。

訳者

解悟（かいご）

アルトゥロ・グラアフ

頼み入りし空なる幸（さち）の一つだにも、忠心（まごころ）ありて、
　とまれるはなし。
そをもふと、胸はふたぎぬ、悲にならはぬ胸も
　にがき憂（うれひ）に。
きしかたの犯（をかし）の罪の一つだにも、懲（こらし）の責（せめ）を
　のがれしはなし。
そをもふと、胸はひらけぬ、荒屋（あばらや）のあはれの胸も
　高き望に。

篠懸（すずかけ）

ガブリエレ・ダンヌンチオ

白波（しらなみ）の、潮騒（しほさゐ）のおきつ貝なす
青緑（あをみどり）しげれる谿（たに）を
まさかりの真昼ぞ知（しろ）す。
われは昔の野山の精を
まなびて、こゝに宿からむ、
あゝ、神寂びし篠懸（すずかけ）よ、
なれがにほひの濡髪（ぬれがみ）に。

海光

ガブリエレ・ダンヌンチオ

児等よ、今昼は真盛、日こゝもとに照らしぬ。
寂寞大海の礼拝して、
天津日に捧ぐる香は、
浄まはる潮のにほひ、
轟く波凝、動がぬ岩根、靡く藻よ。
黒金の船の舳先よ、
岬代赭色に、獅子の蹈留れる如く、
足を延べたるこゝ、入海のひたおもて、
うちひさす都のまちは、
煩悶の壁に悩めど、
鏡なす白川は蜘手に流れ、
風のみひとり、たまさぐる、
洞穴口の花の錦や。

青空文庫情報

底本：「海潮音　上田敏訳詩集」新潮文庫、新潮社
　　1952（昭和27）年11月28日初版発行
　　1968（昭和43）年1月15日20刷改版
　　1977（昭和52）年6月30日35刷
※冒頭の献辞を「遙に此書を満洲なる森鴎外氏に献ず」としている異本が多いが、底本のままとしました。
入力：山口美佐
校正：Juki
1999年7月1日公開
2011年1月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海潮音

上田敏

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　上田敏訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/